後に生れて道を學ぶ人を云ふ、論語に「子曰、後生可レ畏、焉知二來者之不レ如レ今一」と◆景茂八幡の山の井に住む大神氏、笛吹地下の樂人也◆笙　雅樂に用ゆる樂器の名、十七の管を環に立列べたるもの◆性骨を加へて　吹き方に口傳ある上に天性其骨を具せざる可らずとの意也◆呂律の物に　調子の物に合はぬは其吹人の拙き咎にて樂器

傳の上に、性骨を加へて心を入るゝ事、五の穴のみに限らず、偏に除くとばかりも定むべからず。惡しく吹けば、いづれの穴も快からず。上手はいづれをも吹き合はす、呂律の物にかなはざるは人の咎なり。器物の失にあらずと申しき。

（講譯）　四條黄門が命じて云はれるに『龍笛と云ふ男は音樂の道に於いて確かに名人であるが此間來たつてこんな話をやつた未熟なるものがかう申してはまことに痛み入る次第では御座りまするが横笛の五ッの穴は少々如何かと存じますと申しますのは干の穴は平調、五の穴は下無調で御座いますでその間に絶勝調があることになつて居ります又上の穴は双調次に鳧鐘調をおいて夕の穴が黄鐘調でありますに次に又鶯鐘調をおいて中の穴が盤涉調中のと六の間には神仙調が御座いますこんな風にその間々には各々一律づゝ含

の難にあらずと云ふ也

【第二百二十段】

まれ居ますのに五つの穴だけでは上との間に調子を含まず而も間をくばることは他の所と同じですからその聲はいやなる聲でありますで之を吹く時には少し口の加減をするさうしないと云ふと他のものにあいませんからとこんな話をした成程よく道理のわかつた申しやうでまことに面白い先達從生を恐るとは卽ちこれである』とは之である大に感服して居られた所がその後になつて又景茂と云へる樂人がこんな話をやつたそはつまり前とは反對であつてかういふのである『笙は初めから・ヤンと調がとゝなへてあるから唯これを吹けばよい所が横笛はさうは行かぬ吹きながらいきをとゝなへて行くのであるから穴毎に口傳があるその上に又各自の個性を加へて一生懸命にてやるそれが必ずしも五の穴だけではない唯もう指を少し横へやるだけではない吹き方が惡かつたとならばどの穴だつていやな音がする上手になればどの穴だつてうまく吹けまする調子のよくあはないのは樂器の罪ではない吹く人の罪でありますと云つた

【第二百二十段】　何事も邊土は卑しく、頑なれども、

◆邊土　田舍の事、古語に粟散邊土など云ふ事あり◆天王寺　大阪南區にあり、四天王寺也天台宗にして聖德太子の創建に係り、用明帝の二年に成り後推古帝の時現地に移す◆伶人　樂人の事、黃帝の世、伶倫音樂を造る、此故に音樂の人を伶人或は伶官と云ふ◆節奏　師範定規の意にて、これに依りて管絃の調子を合はせる故かく云ふ◆六時堂　天王寺にあり、晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の六回、行を勤むる所也◆黃鐘調　黃鐘は律の本にて中央の調子也◆涅槃會　二月十五日（陰曆）釋迦入滅の日也◆聖靈會　陰曆二月二十二日、聖德太子の忌日にして、四天王寺にて法會を營み舞樂あり◆指南　手本の意也、支那古代の羅針盤たる指南車より來れる也◆無常の調子　平家物語に一祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり一とあり◆祇園精舍　天竺にありて釋迦の說法せし所也、精舍は寺と譯

天王寺の舞樂のみ都に恥ぢずといへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、當寺の樂はよく圖を調べ合せて、物の音のめでたく整ほり侍る事、外よりも勝れたり。故に、太子の御時の圖、今に侍るを節奏とす、所謂六時堂の前の鐘なり。其の聲黃鐘調の最中なり、寒暑に從ひて上り下りあるべき故に、二月の涅槃會より聖靈會迄の中間を指南とす、秘藏の事なり。此の一調子をもちて、いづれの聲をも整へ侍るなりと申しき。凡そ鐘の聲は黃鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄替へられけれども、叶はざりけるを、遠國より尋ね出されけり。法金剛院の鐘の聲、又黃鐘調なり。

（講譯）『何事でも地方の事はいやしいものであるが天王寺の舞樂だけは都に恥ぢぬ』と云つたる所が天王寺の樂人の云へるに『この寺の音樂はよく調子の圖を調べ合せてするのであるからその調のよくかなつて居れることは他所には到底比較はないそれは聖德太子の御時の圖が今日も殘つて居れるのを標準といたすのでありまする所謂る六時堂の前の鐘が卽ちそれであつてその聲は丁度黃鐘の最中で御座る但しこれでも寒暑によつて音に變化がありまするので二月の涅槃會より聖靈會までの中間を以て標準といたすのでありまする是は秘訣で御座るそして此の一調子を以て總べての聲をとゝなへるのです』と申した、一體鐘の聲は黃鐘調であるべきものな

す◆無常院　祇園精舎中の一寺院◆西園寺　衣笠山の東北にありしと云ふ、太政大臣公經公の家也◆法金剛院　本名天安寺、眞言宗にして待賢門院の建立にかゝる、嵯峨の椎野にあり

〔第二百二十一段〕

◆建治、弘安　後宇多天皇の御代の年號◆放免　檢非違使廳の雜役をつとむる者◆祭の日　賀茂神社の祭の日也◆水干衣服の名也◆歌の心「くものいに荒れのであるこれはとりもなほさず無常の調子でかの祇園精舎の無常院の鐘の響であるかつて西園寺の鐘を黃鐘調に鑄やうと云ふことがあつて幾度も幾度も鑄かへれたるもどうもうまく出來なかつたので遂に遠國にあたのをば持つて來られたと云ふことであるが法金剛院の鐘の聲も同じく黃鐘調である

〔第二百二十一段〕　建治弘安の頃は、祭の日の放免のつけ物に、異樣なる紺の布四五端にて馬を造りて、尾髮には燈心をして、蜘の圍かきたる水干に著けて歌の心など云ひて渡りしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしかと、老いたる道志共の今日も語り侍るなり。此頃はつけ物年を追ひて過差殊の外になりて、萬の重き物を多くつけて、左右たる駒はつなぐとも二道かくる人は賴まじ」の古歌をうたひつゝ行くなる可し◆道志　明法道の輩六位の時、衞門志に任じて使廳の諸公事を奉行する者を云ふ、こゝは祭の下奉行する者を云ふ

〔第二百二十二段〕

◆竹谷の乘願房　山城國醍醐にあり、乘願房の袖を人に持たせて、自からは鋒をだに持たず息つき苦しむ有樣いと見苦し。

（講讃）　建治弘安の頃には賀茂の祭の日のつけものに妙なる紐の布四五端にて馬を拵えてその尾を髮とは燈心を以てするそしてこれに蜘の巢の形をかいたところの水干をきせて蜘に緣あるところの古歌をうたひながら練つて行くのを何時も見たが隨分面白いところのものであつた』と今でも年をとつたる道志どもが話して居るのであるところが近來はそのつけものが無暗と贅澤山になつて來ていろ〳〵の重いものを澤山につけて左右の袖を人に持たせて本人は鋒さへ持たずそれでくるしさうにしてやつて行くやうなのはまことに見にくいものだ

〔第二百二十二段〕　竹谷の乘願房、東二條院へ參られたりけるに、亡者の追善には何事か勝利多き、と尋

は浄土宗の名僧也◆東二條院　後深草天皇の皇后、御名は公子と申し奉る◆追善　追薦とも云ふ、跡より追ひすゝむる善根の意也◆勝利多き　すぐれたる利益は何事が多きとなり◆光明眞言寶篋印陀羅尼　共に經文の名にして此眞言神咒を乞ふ者亡魂に廻向すれば忽極樂淨土に生にて一切種智を證し位補處に至るとぞ◆稱名　彌陀念佛の事也◆巨益　大なる利益

ねさせ給ひければ、光明眞言寶篋印陀羅尼と申されたりけるを、弟子ども如何に斯くは申し給ひけるぞ、念佛に勝る事候ふまじとは、など申し給はぬぞと申しければ、我宗なれば左こそ申さまほしかりつれども、正しく稱名を追福に修して、巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせ給はゞ、如何申さんと思ひて、本經の確なるにつきて此の眞言陀羅尼をば申しつるなりとぞ申されける。

（講譯）　竹谷の乘願房が東二條院の後深草院皇后の御許へ參られたるところが皇后より『亡者の追善には何が一番よいや』とお尋れがあつたので乘願房『それには光明眞言寶篋印陀羅尼が一番よろしうございます』とお答え申し上げた、すると弟子どもが之を聞いてから『何故にそんなことを仰しやつたので御座りまするかどうして念佛が一番よいとは仰しやらなかつたので御座るか』と云ふ、すると一いや其處ぢやが我が宗旨ならば勿論さう申し上げるのであつたが確かに追善のなりに念佛を申すのが最もよいと書いたところの證文を見ぬ故に若しさう云つてそれでは何にあるかとお問ひになつたらばどんなに申したものであらうと思つて本經の確かなるものについてこの眞言陀羅尼がよいと云つたのでぢや』と申された

〔第二百二十三段〕　田鶴のおほいどのは、童名たづ君なり、鶴を飼ひ給ひける故にと申すは僻事なり。

（講譯）　九條基家公を田鶴の大殿と云へるのであるがこれはなぜであるのやと云ふに基家公の童名を田鶴君といつたからやと云つて居れるのは誤りである

〔第二百二十三段〕◆田鶴のおほいどの　後京極攝政良經公の三男九條前内府基家公也　鶴殿と號す、又砂金大臣殿とも云ふ

〔第二百二十四段〕◆陰陽師有宗入道　陰陽頭正三位安倍有宗にして、兼好の許へ尋ね來りし也◆植うる事を勤む　論語に「禹稷躬稼而有二天下一」とあり又中庸に「人道敏レ政地道敏レ樹」とあり

〔第二百二十四段〕

陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて尋ねまうで來りしが、先づさし入りて、この庭の徒らに廣き事あさましくあるべからぬ事なり、道を知るものは植うる事を勤む、細道一つ殘して、皆畠に作り給へ、と諫め侍りき。誠に少しの地をも徒に置かん事は益なき事なり。食ふ物藥種など植ゑ置くべし。

（講譯）　陰陽師であるところの有宗入道が鎌倉から京へ上り來たりて自分（兼好）の所へ訪れて參つて門に這入ると早速『この庭はあまり廣すぎる馬鹿なることぢや昔から道を知るものはつとめて物を植ゑると云へることであるがこんな廣いところの庭をたゞ何んにも植ゑものすらせずにうちやつて置くのは勿体ないことぢや細道一つだけのこして後は皆畠にして仕舞はれのがよからう』

〔第二百二十五段〕◆多久資　伶人にて多は氏なり◆通憲入道　少納言藤原通憲入道して信西と云ふ正五位下日向守たり◆引き入れたり　烏帽子をきること となり◆白拍子　今の藝者の如きもの盛衰記平家物語には島の千歳若の前を其の始めと云とかう意見した實際少しの土地でもたゞ遊ばせておけるのは無益なる事である食ふ物でも藥になるところの物でも植ゑて置く方がよいものであらう

〔第二百二十五段〕

多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に興ある事共を選びて、磯の禪師と云ひける女に敎へて舞はせけり。白き水干に鞘卷をさゝせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞ云ひける、禪師が娘靜といひける、此の藝を繼げり。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣を謠ふ。其の後源の光行、多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり、龜菊に敎へさせ給ひけるとぞ。

へり◆佛祠の本緣　神佛の本事緣起を云ふ◆源光行　土岐左衛門尉光行、後鳥羽天皇の北面の武士なり◆龜菊　後鳥羽天皇御寵愛の舞妓なり

（講譯）　多久資がこんな話をしたることがある、通憲入道がいろ〳〵あるところの舞の手の中にて第一番に面白いものを選んで磯の禪師と云ふ女に敎へて舞はせたるがその舞姿は白い水干をきて鞘卷をさし烏帽子をきると云ふのであるから全く男の風である故に男舞と云つた、そしてこの娘に靜と云ふのがあつたがこの藝を繼いで習つたが所謂る白拍子の始めはこれである但し初めは神佛の緣起などを歌つたところのものであるがその後源の光行と云へる人がいろ〳〵の歌を作つたが又後鳥羽天皇におかせられてもお作りになつたる所のものがあつてそれは彼の龜菊に敎へられたと云ふことである

〔第二百二十六段〕　後鳥羽院の御時、信濃の前司、行長稽古の譽れありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異

【第二百二十六段】

◆信濃前司行長　傳記詳ならず◆稽古　古を考へ知る事、古事を知れるよしの譽也◆樂府　の御論義　白氏文集三四卷にある新樂府にて其樂府の中の不審を問答するを論義といふ、さて番とは學者を片わけて番を定めて論義せしむる也◆七德の舞　白氏文集の新樂府の首にある舞の名にて、禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和衆、豊財の七德也◆冠者　冠したる者の兼にて、元服したる成年を云ふ◆山門

名をつきにけるを、心憂き事にして、學問を捨てゝ、遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝ある者をば下部迄も召し置きて、不便にせさせ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此の行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に敎へて語らせけり。さて山門の事を殊にゆゝしく書けり。九郎判官の事は委しく知りて書き載せたり。蒲の冠者の事は能く知らざりけるにや、多〳〵の事共を記し洩らせり。武士の事弓馬の業は、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が性質の聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

比叡山延暦寺を云ふ◆九郎判官　源義經の事九郎は義朝の九男、判官と云ふは檢非違使尉に任官せし故也◆蒲冠者　義經の兄範頼を云ふ

（講譯）　後鳥羽天皇の御時のことであつたが信濃の前司行長と云へるところのものがあつた、このものは頗る學問の道にすぐれたりとの名もあつたところのものであるが或る時のことであつた樂府の御論議の番に召されて七つあるべきゝのなる七德の舞の二つを忘れて居つたる故に五德の冠者と云へるところの異名を取つたが彼れはこれを非常に恥ぢて遂に學問に緣を絶つて坊主となつて仕舞つたで丁度その頃慈鎭和尙が何か一藝のあるところものは下部までも呼んで世話をせられたので彼れも亦その世話にせられたる仲間入りをしたさてかの平家物語と云へる書物はこの行長が作つて生佛と云へるところの盲目者に教へて語らせたる所のものであるのだが慈鎭和尙に世話になつたためなのであらうか比叡山に關係したる事だけは特に骨を折つてよく書いて居るやうである又義經の事はしるしく知つて書いて居るのであるがその兄の範頼のことはよく知らなかつたつた爲めなのであらう事跡の書き洩らしたるもの非常に多い且又武士の事や弓馬の業はその生佛が關東生れであるのだから大方生佛が武士に聞いて書せたるものであるのだ今の琵琶法師の語る聲はその生佛の自然の聲を眞似たるものだ

〔第二百二十七段〕◆六時禮賛　晝夜の六時に念佛を勤めて淨土を禮讃し罪障を消滅するわざを云ふ◆安樂淨土宗を唱へたる僧、宮女に戒を授けて尼としたる故後鳥羽上皇の怒に觸れ斬に處せられたり◆太秦　山城國嵯峨附近にある廣隆寺を太秦寺と云ふ、秦氏の人來てありし故かく云ふ也◆善觀房　傳記不詳◆節博士　聲をさし

〔第二百二十七段〕

六時禮賛は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りて勤にしけり。其の後太秦の善觀房といふ僧、節博士を定めて聲明になせり、一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代より始まれり。法事讃も、同じく善觀房始めたるなり。

（講譯）　六時禮讃と云へるのは法然上人の弟子であつたところの安樂と云へる僧がいろ〳〵なる經文をあつめて作つたところのにてお勤めするときによんだのでそれをその後に於いて太秦の善觀房と云へる僧が節をつけて聲明したる所のものであるこれが一念の念佛のはじまりでこれは實に後嵯峨天皇の御代に於いて始ま

て其節の指南とする事也◆聲明　聲韻の學に云ふ、聲に節調を附して朗讀する也、印度にては五明の第一とし支那にては梵唄と云ふ◆法事讃　上下二卷あり善道の作にて善觀房は節博士つけたる也

〔第二百二十八段〕◆千本　洛西にあり◆釋迦念佛　釋迦堂の佛會也、二月九日より十五日迄、涅槃の像をかけて釋迦の名號を唱ふる也◆文永　龜山天皇の御時の年號◆如輪上人　傳記不詳

つたのである法事讃と云ふことも同じくこの善觀房の始めたるところのものである

〔第二百二十八段〕　千本の釋迦念佛は文永の頃如輪上人これを始められけり。

（講譯）　千本の釋迦念佛は文永年號のころに當りて如輪上人の始めたるところのものであるぢや

〔第二百二十九段〕　善き細工は少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。

（講譯）　良きところの細工師は少し鈍い位なる刀を使ふといふことであるが、譬へば攝津の國の勝尾寺の觀音の像をきざんだるところの妙觀の刀の如きは、あまりよく立つものではなかつた

〔第二百二十九段〕◆妙觀　寶龜年中の人　彫像師なり、攝津勝尾寺の觀音像を刻せり◆いたく立たず　刀の目淺くよく切れぬを云ふ

〔第二百三十段〕◆五條の內裏　後醍醐天皇の時皇居なりしとも又後白河天皇の法住寺殿　りとも兩說あり◆藤大納言　大納言藤原爲世なりと云ふ◆未練の狐　化方の不熟練なる狐也

〔第二百三十段〕　五條の內裏には化物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、殿上人ども黑戶にて碁をうちけるに、御簾を揭げて見る者あり。誰ぞと見向きたれば、狐、人のやうについゐて差覗きたるを、あれ狐よと騷まれて、惑ひ遁げにけり。未練の狐化け損じけるにこそ。

（講譯）　昔し五條の內裏には妖怪が居つたのであつた、所が之について藤大納言殿がこんな話をなしたるのである一殿上人等が黑戶の御所にて圍碁をやつて居つたところが突然に御簾を揭げて見るところのものがある、こは誰れなるやらと思つてその方を見ると狐が恰も人のやうなる風をして此の方へのぞいて居るのであつた、やあ狐ぢやと騷ぎ立てると狐はあはてゝ逃げて仕舞つた未熟な狐がばけそこれたのだ』

〔第二百三十一段〕◆園の別當入道　參議檢非違使別當藤原基氏卿、園と稱し出家して圓空と稱す◆庖丁者　丁氏と云ふ者よく庖厨の事を知りて割烹せる故庖丁と云ふ◆うち出でん　見たいと言ひ出さんも如何と所望し兼れたる也◆百日の鯉　毎日稽古に百日間續けて鯉を切る也◆北山太政入道　太政大臣西園寺公經公つてと也◆大

〔第二百三十一段〕園の別當入道は、双無き庖丁者なり。或人の許にて、いみじき鯉を出したりければ、みな人別當入道の庖丁を見ばやと思へども、容易くうち出でんも如何と躊躇ひけるを、別當入道さる人にて、此の程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず、扨げて申し受けんとて切られける、いみじくつきづきしく興ありて、人ども思へりけると、或人北山太政入道殿に語り申されたりければ、斯樣の事、己は世に煩く覺ゆるなり、切りぬべき人無くば、給べ、切らんと云ひたらんは猶よかりなん、何條百日の鯉を切りし、をかしく覺えしと人の語り給ひしをかし。大方ふるまひて興あるよりも興なき安らかなるが勝りたる事なり。賓客の饗應なども、序をかしきやうにとりなしたるも誠によけれども、唯其の事と無くて取り出でたるいとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて是を奉らんといひたる、誠の志なり。惜むよしして請はれんと思ひ、勝負の負け業にことづけなどしたるむつかし。

（講譯）園の別當入道は非常に料理に上手なる所の方であつたが或人の所にて非常に大きなる所の鯉を出だしたるので來たつて居たるところの人々は皆今日こそは一つ名高い園の入道の料理の程のお手際を拜見いたしたいものであると思つたがさて唐突に

さひて也◆勝負の業　人にやる可き物を碁將棋等の堵物にして負けて遣るやうにする事也

云ふのもどうかゝ聊か躊躇いたして居ると入道も中々ぬからぬところの男であるので『實はこの頃修業のため百日つゞけて鯉を切るといふぎやうをして居るのでありまするがどうも今日だけ止めると云ふ譯には行きませんからまあ特別で私に切らせて戴きませう』とこんな事を云つてそれを切つた、見て居りたるところの人も流石に名人の名に恥ぢないといたく感服仕つて面白がつて居たところがこれを或人が北山太政入道に話したれば感服されるであらうと思ひの外に『いや自分はそんなことはいかにもうるさいやうに思ふぢや若し切るとこころの人がないとなれば私に貸して下さい切ませうと云へばよいのぢや何もわざ〳〵百日の鯉を切るなどと餘計なることを云ふの必要はないものぢや』と仰せられた成程面白いことであると思つ或人が自分に話した自分にもこれは至つて面白いところのことつてもちやと思ふ一体強いてこしらへて面白いよりはたとへ面白くても安らかな方がよいのである客をもてなすなどに於つけて体にするやうになせるのもよいことではあ

大正九年二月一日印刷
大正九年二月五日發行

著作者　妹尾薇谷
發行者　大浪淵
大阪市南區東高津通五丁目八十六番地
印刷者　吉村源次郎
大阪市南區高津通二丁目第一番地
印刷所　山田元吉
大阪市南區安堂寺橋通二丁目廿六番地

著作權所有

新釋徒然草
定價壹圓貳拾錢

發行所
大阪市南區心齋橋北詰
駸々堂書店
振替口座大阪一〇三五番

欠

吉田奈良丸講演

縮刷

大和櫻義士の面影

大和魂と武士道とは兩々相俟つて本日民族の心隨たり然して武士道は赤穗四十七士によりて振起されたるなり本書は浪界の泰斗吉田奈良丸師の口演せし處、弊會の切に乞て刊行せしもの、世に傳ふる義士傳と其類を同せざるや勿論なり擴大の長口舌を廢し、茲に家庭的好讀物として先本書を薦む

三六版 天金箱入
總クロース 全二冊
定價金各一圓二十錢
郵稅一部 六錢

發行所 川崎榮會

國定教科書標準の辭書

大好評

大正學生自習辭典

宮內省御用掛 從三位勳三等 文學博士 三島毅先生題字
岡山縣視學官 法學士 前田多聞先生序
第五高等學校教授 從五位 山田準先生序
陸軍大學教授 從六位 西村豐先生序
岡山縣視學官 多田定之進先生序
小野康治先生著

（尋常高等用）

ポケット形總クロース金文字入 頗美製本
紙數 壹千頁
全壹冊 定價金八十錢 郵送料八錢

學生自習辭典が、澤山に出版されて居りますが、諸君が實地に使用する時に、難解の文字やら、又平易に失した種々の缺點を見出されて、實際に完全無缺と云ふものが見當らないでしやう、小野先生は、多年敎鞭を執られて、熱心に、しかも親切に之れらの缺點を調べられて、諸君が實際に使用が出來て、自習用にも適した完全無缺なものを世に出して社會に稗益しやうとの誠意で之を公にせられた、弊堂は諸君の熱心なる勉强に酬ひんがために、未だ他に見る事の出來ない非常に破天荒な大廉價を以て提供するのです、他の辭書と見比べて成程 他に勝れてゐる諸種の點を認められて、是非御求めあらん事を願ひます。

本書の特色

二重索引を附して、總畫、扁、造、によつて見出樣にしてあるのです。

大阪市心齋橋北詰
發行所 駸々堂書店
振替口座大阪千〇三十五番

太陽出て諸星光を失ふ如く多數の類書爲に光を失ふに至らん是理想的の

〔大好評〕

新式 摸範いろは辭典

杉野法學士
大原海軍中佐 序文
岩崎文學士
妹尾早大文學士 共著

繁雜なる現代に於ける辭典の得點は語字の豐富なると共に又索引方法簡易ならざらず、如何に夥多の字數を收めたりとするも索引の法不完ならんか殆んど其要をなさず本書は此點に深く鑑み、岩崎妹尾の兩文學士が幾多の日子と、苦心を以て編纂されしものにて、其收むる處日常堅要の熟語文字等無慮八萬語然も其索引の容易なること嚢中を探るに異ならず、加之裝釘の美なる價格の低廉なる蓋し摸範辭典の名誠に適當なるべし本書は學生諸君は素より實業家、教育家諸事務員一般の家庭に知識の大寶庫として一本を御購求あらん事を望みます

總クロース箱入
紙數千八百頁
洋本 頗美
定價金壹圓七十錢
送料金八錢

大阪市心齋橋北詰
發行所 駸々堂書店
振替口座大阪千〇三十五番

最新版

小野康治先生新著

大正 國語新辭典

三六版總クロース製
金文字入優美函入 全一冊 定價金 紙數千七百頁 小包送料金拾八錢

初等教育界に分團教授法の唱導せらるゝや茲に年あり其當然の結果として自習辭典の刊行せらるゝもの實に數ふるに遑あらず、されど優勝劣敗は自然の趨勢なり、弊堂出版の小野先生著「大正學生自習字典」及「模範學生自習辭典」は他の企及を許さゞる特長を以て幾多の辭書を壓倒して獨り其威を擅にせり。

而して其辭書たるや中には配するに多少の國語辭典を以てせるものありと雖も概して漢辭典なり由來國語の研究には漢字典及國語辭典を併用するに非ざれば其効果を全ふすること能はず又兩辭典併用の場合に於て同一著者の手になれる連絡あるものに如かざるは今更喋々を要せざるなり。

茲に於て本書の出版に依り我が國語辭書界に一新紀元を劃するに至りたるは、蓋し偶然に非ざるを揚言して憚ざるなり。

發行所 大阪市心齋橋北詰 駸々堂書店
〔振替口座大阪千〇三十五番〕

發賣所 全國各地書籍雜誌店

受驗準備補習の良師友

普通學研究會著

入學試驗準備自習書

中學校
實業學校
高等女學校

中等學校入學受驗生の爲めに作つたものである、故に其問題は小學校の教科書により各府縣の入學試驗問題を基礎として國語と算術を問答體にした良書也安心してしつかり此書物によつて準備しなさい合格は少しのうたがひもありません。

菊版形美本
紙數二百四十頁
定價金六錢
郵送料金

入學豫習會編纂

入學準備綴方新自習書

中學校
幼年學校
實業學校
師範學校
高等女學校

如何にせば入學試驗に對して競爭に勝ち得るかこの要求の答が本書です本書は新らしく進歩した模範的の作文書であることは左の點についても知ることが出來ると信じます。

1 作文力の根本をきはめてある事。
2 各文題について作り方の秘訣を示してある事。
3 約二百三十題を三ヶ月を終るやうに編まれてあること。

菊版形美本
紙數二百六十頁
定價金一
郵送料金六錢

2541
2433
148

大阪市心齋橋北詰
發行所 駸々堂書店
電話長船塩一〇〇七番 振替大阪一〇三五番

諸君！學生諸君！

入學生諸君斯の如き良書他にあり

中學校 女學校 實業學校 入學準備 算術

長瀨研究館主龜鶴先生新著

本書ハ先年長瀨式新式研究算術書ヲ著作サレ非常ノ歡迎ヲ得タル長瀨龜鶴先生ガ時勢ノ進運ニツレ入學競爭ノ益々激烈トナルニツレコヽニ在來ノ準備書ノアラユル粹ヲ抽キ又先生獨特ノ考案ニヨリテ編纂セラレタル理想的入學豫習書ナリ

定價金四十錢
郵送料四錢

系統的分類的 **新式豫習算術**

算術解法ノ秘訣

本書ハ國定教科ノ復習ヲ土臺トシ之レガ應用千變萬化ヲ示シテ算術解法ノ秘訣ヲ一々丁寧ニ述ベ次ニ實力ヲ試驗センガ爲メ種々ノ方法ヲ示シ以テ愉快ニ算術ヲ學バシメントスル良師友也

實力試驗法

懸賞問題

【賞】一等一人 二圓書籍券 三等十人 一圓書籍券

第一回懸賞問題ヲ附錄トシ諸子ノ入學力磨カントス規定本書卷首ヲ見ヨ 書籍券。二等五人一圓五十錢書籍券。四等百人上ニ準相當賞品贈呈。

大阪市心齋橋北詰
發行所 駸々堂書店
電話長船塩千〇〇七番 振替大阪千〇卅五番

◆旅行案内部編纂

九州鐵道 旅行案内

三六版美裝
明細なる地圖及び鮮明なる寫眞數十葉挿入
定價金五十錢
郵稅六錢

本邦西部の要地として今や甚大なる進展を見つゝある九州の地や皇祖發祥の地たるのみならず爾來印されたる名蹟多く亦た勝地頗る尠しとせず、然も之等を遺憾なく踏破したる人ありや、恐らく未だ之れあらざるべし、之れ完全なる案内書の無きに起因せずんばあらず、即ち同地の爲め又た未知諸君の爲其地を汎く紹介せんとして最近の情況に鑑み以て上梓するに至りしは本書也、蓋し本書は未だ見ざる九州唯一の案内書たると共に之れに依て學生諸君の修學旅行に將た一般の探勝者諸君に九州各地の商工を視察せんとする諸君の爲め絶好なる指針たるべしと信ず、幸に旅嚢一本を備へられんことを敢て薦む。

發行所　大阪市心齋橋北詰　駿々堂書店　振替口座大阪一〇三五番

發賣所　九州各書店及主要驛内賣店

388
207

終